

ドイツ語の児童書等に関する調査報告

大阪大学大学院 人文学研究科 教授

吉田耕太郎

国際子ども図書館所蔵のドイツ語資料の多くは、ドイツ語圏の出版社や学術団体が主催する絵本や児童書の推薦等に基づいて、ドイツ語圏で注目された戦後の作品が広く収集されている。とりわけ国際子ども図書館が開館した2000年以降のドイツ語圏児童書については、大きな不足は見受けられなかった。今後も、この方針に従って、コレクションを偏りなく拡充していくことが重要であろう。本報告書は、現在の国際子ども図書館のドイツ語資料のコレクションを時代ごとに概観し、資料的価値のある資料を確認しつつ、今後コレクションが望ましい分野、また所蔵したほうがよい事典類について報告する。また今後の選書作業で参考になるドイツ語圏で開催されている児童文学賞の情報も、報告の最後にまとめている¹⁾。

国際子ども図書館が所蔵するドイツ語関連の児童文学資料のコレクションには、18世紀に出版された稀覯本から現代のものまでが含まれている。報告に先立って、このコレクションに該当する時代のドイツの歴史について、簡単に概観しておきたい。現在ドイツ語による子ども向けの書籍またはそれに関連する研究書や雑誌類が出版されているのは、主に、ドイツ連邦共和国、オーストリア共和国、スイス連邦の3国となる（本来であればリヒテンシュタイン公国も加える必要がある）。3国の人口は、あわせて1億人以上となる。しかし人口に占める移民も多く（ドイツでは約4分の1）、またスイスではドイツ語以外に3つの言語が公用語として認められている。このような複雑な人口構成から、これら3国の人口からドイツ語話者またはドイツ語で書かれた児童文学の読者数を単純に導き出すことは難しい。

またこの3国は、ヨーロッパの中部に位置しているが、歴史的にみると、それぞれの地域の状況は時代で異なっていた。15世紀から実質的に独立した政治圏を構築していたスイス地域をのぞいて、これらの地域は、9世紀以降神聖ローマ帝国という大きな政治体を形成していた。現在のドイツやオーストリアというふたつの国が登場するのは、1871年のドイツ帝国の成立以

(1) 表記について。国際子ども図書館所蔵資料については、『日本語書名（邦訳がない場合は報告者による和訳タイトル）』の後ろの【】内に請求記号を記載した。請求記号のないものは未所蔵で、購入してもよいと思われる書籍にあたる。これらの情報は選書リストにまとめ、以下、リスト番号を脚注に記載した。

降のこと、しかし当時のドイツ帝国は、現在のポーランドやチェコにまで広がる地域も含んでいた。オーストリア帝国もまた、1867年から隣国のハンガリー帝国とともにオーストリア＝ハンガリー二重帝国という政治体を構成しており、現在のウクライナやルーマニアの一部もまた広い意味でドイツ語文化圏であったと言えるだろう。

オーストリアからハンガリーが独立するのが1918年、またドイツが現在の国境線をとるのが、第二次世界大戦後となるが、ドイツは西ドイツと東ドイツという政治的には全く異なるふたつの国に分割され、出版された児童文学の傾向も当然異なるものとなった。ドイツが再統一したのが1990年、ここで改めてドイツの児童文学というものが誕生するとも言えるが、しかしすでに述べたように、そこには必ずしもドイツ語話者だけが存在しているのではない、言語的にも文化的にも、多様な社会であることを忘れてはならない。しかしこうした複雑な歴史を通じて、それでも、やはり、ドイツ語という言語が使用されつづけてきたことも確かである。こうした複雑な歴史を視野にいれつつ、国際子ども図書館所蔵のドイツ語児童文学について報告することにしたい。

i. 1700-1810頃

18世紀ヨーロッパにおいては、タイトルに「子どものため」と題された書籍が出版されるようになる。こうした出版事情は、上流の社会階層において、子どもの教育のために書籍を利用することが広まった変化を反映しており、子どもを直接的または間接的に受け手として想定した書籍が市場として確立されつつあったことを示している。この時期にあたる代表的なものが、『子どもの絵入り本』*Bilderbuch für Kinder*【Y11-A1215】だ。この本にはタイトルのとおり、多くの彩色された銅版画が収められている。出版したのはワイマールで出版社を経営していたフリードリヒ・ヨーハン・ユスティン・ベルトゥーフ Friedrich Johann Justin Bertuch であるが、彼の本業は、家具、壁紙、装飾に使う造花や彫像など、住居を飾る高級品の製造である。この本は、挿し絵つきの子どもの向け百科事典に相当するものであった。国際子ども図書館では、この資料を所蔵²している。この版は、保存状態も良好、人の手による彩色も丁寧な版であり、史料価値の高いものである。

ただし、このように多数の銅版画を綴じ込んだ書籍は、非常に高価であった。別の言い方をすれば、こうした書籍は、子どもたちが自由に手に取った書籍というよりも、親が挿し絵を子どもにみせながら、口頭で説明するような教育補助教材として活用されたものだった。このような絵を使った最初期の教材として知られるのが、ヨーハン・アモス・コメニウス Johann Amos Comenius の『世界図絵』*Orbis sensualium pictus* である。この資料もまた、1746年刊【YZ27-A1】のオリジナルをはじめ、全7点が所蔵されている³。

この時期、教育の場面で、挿し絵を使って、直感的に教えるべき内容を伝えることの効果が

(2) <https://www.kodomo.go.jp/search/collection/other06>

(3) https://ndlsearch.ndl.go.jp/rnavi/children/post_237

認められつつある時代だった⁴。挿し絵を使った書籍群の中の最大のジャンルは、絵で見る聖書 (Bilderbibel) や絵入りの教理問答の類いであった。

挿し絵はないものの、「子ども向け」と冠した書籍として、ヨーハン・マティアス・シュレーク Johann Matthias Schröckh 編『子ども向けの世界史読本』*Allgemeine Weltgeschichte für Kinder* 【Y2-B447】 【Y2-B448】、それからヨーハン・ザミュエル・ハレ Johann Samuel Halle の『年長の若者向けの、新旧の世界史また世界の国々や民族についての貴重な出来事の概要』*Uebersicht der Denkwürdigkeiten aus der alten und neuen Weltgeschichte, der Staats- und Völkerkunde für die erwachsene Jugend* 【Y2-B461】がある。これら文字のつまったページを眺めてみれば分かるように、こうした子ども向け書籍が、読み聞かせてもらったもの、または読み聞かせのネタとして利用されたものであった。このような 18 世紀を通じての子どもの読書環境を伝える史料として、ヨアヒム・ハインリヒ・カンペ Joachim Heinrich Campe の『新ロビンソン』*Robinson der Jüngere* 【Y8-A5281】、またヨーハン・ダーフィット・ウィース Johann David Wyss の『スイスのロビンソン』*Der schweizerische Robinson* 【Y8-B14685】 (アニメ『ふしぎな島のフローネ』の原作の一部) がある。これらは漂流譚である『ロビンソン・クルーソー』、または異国への航海という人の移動を、世界の地理、動植物、習俗についての知識を教えるためのプロットとして活用するものであった (「ロビンソンもの (Robinsonade)」については後述)。なおカンペは、自ら教師も務めた教育者であり、文字を覚えるための初学者用の『ABC 本』*Abeze- und Lesebuch* 【Y8-B17949】も出版していた。国際子ども図書館が所蔵するのは 1830 年の再版であり、やはり歴史的価値の高い版である。

なお、前述のハレによる『年長の若者向けの、新旧の世界史また世界の国々や民族についての貴重な出来事の概要』は、内容はともかく、その実物は、ドイツ内の数ヶ所の大学図書館で確認できるだけのものである。さらに国際子ども図書館所蔵の版は、彩色銅版画もすべてのこされた世界的にみても史料価値の高い資料と判断できる。本資料の保護のためにも (公開の可否はともかく) 早急なデジタル化を強く求めたい。ちなみに、こちらの書籍は、1796 年と出版年が記載されているが、同時代の史料を参照すると、1795 年に出版されたと伝えられている。

ii. 1813 年頃から 1880 年頃まで

19 世紀に入り、子ども向けの書籍として新たに登場したのが、グリム童話に代表される童話 (メルヒェン (Märchen) / フェアリーテール (Fairy tale)) に類されるものであった。18 世紀末から続いたフランスとの戦争を通じて、民衆たちが長らく信じてきた魔女や魔法といったモチーフがあらためて注目されるようになる。こうしたモチーフは、18 世紀を通じて啓蒙思想 (または学問の近代化) の中で、荒唐無稽なものとして批判されてきたのだが、民族に根ざす独自の価値観 (これが 19 世紀のナショナリズムの基盤となる) が表現されたものとして、再評価され、口承で伝わってきた物語や伝説の類いが盛んに収集されるようになった。グリム童話

(4) リスト No.1

も、このような口承文化の収集の流れの中に位置づけられるものである。

国際子ども図書館には、グリム童話については、翻訳を含めて多数の版が収められている。さらに童話や民話をより深く知ろうとする際に必要となる事典 *Enzyklopädie des Märchens* 【KE112-B47】 (YZ-388-B9)⁵、モチーフ事典である『民間説話：世界の昔話とその分類』【G189-L8】 (YZ-388-トン)、さらにグリム童話のハンドブック *Handbuch zu den "Kinder- und Hausmärchen" der Brüder Grimm : Entstehung -- Wirkung -- Interpretation* 【YZ-B2289】をはじめとする専門的な事典類も所蔵されている。こうした事典類については、最新の研究成果を反映した改訂版等も発行されているため、定期的にアップデートすることも必要であろう⁶。

グリム童話の発行に前後するメルヒェン収集の動向を伝える資料として、『少年の魔法の角笛』*Des knaben Wunderhorn* 【Y8-B15430】 【Y8-A5767】、ルートヴィヒ・ベヒシュタイン Ludwig Bechstein の『メルヒェン全集』*Sämtliche Märchen* 【Y8-A4363】、『リューベツァールの物語』*Legenden vom Rübezahl* で有名な、ヨーハン・カール・アウグスト・ムゼーウス Johann Karl August Musäus の『メルヒェンと伝説』*Märchen und Sagen*⁷がある。またグリム以前のメルヒェン集として、ベネディクテ・ナウベルト Benedikte Naubert の民話集⁸も重要であるため収集しておくのが望ましいだろう。なお、グリム前後のメルヒェン集をヒルデスハイムにある出版社オルムス (Olms) がリプリント版のセットとして刊行していたため、こちらも利用者の要望に応じて拡充するのもよいかもしれない⁹。

挿し絵という直感的に教育内容を伝えるための手段が、今日の絵本や児童文学の挿し絵、つまり子どもの想像力を刺激するようなメディアへと役割が変化することになった要因のひとつが、グリム童話の挿し絵にあったと言えるだろう。童話を編集したグリム兄弟の弟にあたるルートヴィヒ・エミール・グリム Ludwig Emil Grimm は画家であり、1825年のいわゆる『小版』*Grimms Märchen : die kleine Ausgabe aus dem Jahr 1825* 【Y8-B9007】 (リプリント) に挿し絵を提供した。グリム童話の歴史的な挿し絵を収集した *Rotkäppchen kommt aus Berlin!* 【YZ-B3161】のような挿し絵カタログも、国際子ども図書館には所蔵されている¹⁰。

グリム童話には、現在でも、新しい挿し絵がつけられている。近年出版されたものの中でも、ズザンネ・ヤンセン Susanne Janssen による『ヘンゼルとグレーテル』*Hänsel et Gretel* 【Y17-B9607】や『赤ずきん』*Rotkäppchen* 【Y17-B1012】は高い芸術性が評価されている。また型抜きをしたページを重ねあわせて奥行きのある独特の挿し絵を発表しているズィビレ・シェンカ

(5) YZから始まる記号は、国際子ども図書館ローカル請求記号。

(6) リスト No.2~4。同一タイトルのものが含まれるが、それぞれ別もの。

(7) リスト No.5

(8) リスト No.6

(9) おおよそ 40 冊ほど。国際子ども図書館には、『ポンメルンおよびリューゲンの民話』*Volksmärchen aus Pommern und Rügen* 【YZ-B1996】、『ラインラントおよびヴェストファレンの民話』*Volksmärchen aus Rheinland und Westfalen* 【Y8-B8994】が所蔵されている。ほかに、タイトルに子ども向けと記載のある作品をリストに追加した (No.7~12)。

(10) 挿し絵に関しては、リスト No.13~15 のようなカタログや、No.16 のような研究書が発行されている。必要に応じて収集することを勧める。

一 Sybille Schenker の『ヘンゼルとグレーテル』 *Hänsel und Gretel* 【Y17-B14335】も所蔵されている。シェンカーは、『赤ずきん』 *Rotkäppchen*¹¹、『かえるの王様』 *Der Froschkönig oder Der eiserne Heinrich*¹²にも新しい挿し絵をつけて出版している。こうした芸術性が話題になったグリム童話も収集する価値はあるだろう。グリム童話の挿し絵ではないが、『エスターハージー王子の冒険』 *Esterhazy* 【Y17-B14450】や『ちいさなちいさな王様』 *Der kleine König Dezember* 【Y8-B10919】などで日本でもよく知られるイラストレーターのみヒャエル・ゾーヴァ Michael Sowa が手がけた作品は、ドイツ語のオリジナルと翻訳あわせて複数作品が所蔵されている。

ヨーロッパでは 19 世紀後半になると、挿絵というものが、子ども向けの書籍へとこれまで以上に積極的に活用されるようになった。『もじゃもじゃペーター』や『ぼうぼうあたま』というタイトルで日本でもよく知られるハインリヒ・ホフマン Heinrich Hoffmann の作品 (*Der Struwwelpeter oder lustige Geschichten und drollige Bilder* 【Y17-B1634】(ドイツ語オリジナルの復刻版))、今日の漫画に通じる物語をコマ割りした挿し絵を使った、ヴィルヘルム・ブッシュ Wilhelm Busch の『マックスとモーリッツ』 *Max und Moritz* 【Y17-B1632】といった作品が登場してくるのもこの時期であった。『マックスとモーリッツ』は、子どもが主人公となっている点も新しく、さらに韻文で書かれており、子どもに読み聞かせる際のリズムカルな文書表現を意図したテキストとしてもおもしろい。

仕掛け絵本が登場してくるのも 19 世紀中葉である。仕掛け絵本の祖とも呼ばれるローター・メグENDORファー Lothar Meggendorfer の作品は、19 点も所蔵されている。メグENDORファーの絵本に、テキストを提供した作家として知られるフランツ・ボン Franz Bonn は、『愉快的博物誌、あるいは滑稽動物学』 *Lustige Naturgeschichte oder Zoologia comica*¹³という作品も発表している。その内容は風刺の性格が非常に濃いために、純粋な児童書と呼べるものではないが、ブッシュが提供した風刺画を子ども向けの作品にとりいれた最初期の例として興味深い。テオドール・フリードリヒ・オットー・ブランド Theodor Friedrich Otto Brand の『お話し絵本』 *Das sprechende Bilderbuch*¹⁴は、紐を引くと音が鳴るしかけを組み込んだ「しかけ絵本」であり、玩具本またはマルチメディア本の祖型もまたこの時期に登場した。このような児童書の多様化または娯楽化の背景には、教育のために使用される教科書というジャンルが成立し、児童書の教育メディアとして役割が減ってきたという歴史的な理由がある。さらにまた 19 世紀中葉になると、もともとは異端的な内容かどうかを判断し、18 世紀以降は倫理的な内容かどうかを判断していた書籍検閲がほぼ撤廃されたことで、作家たちは以前よりも自由に創作活動を行うようになったことも大きな理由であろう。このような時期に、アーダルベルト・メルゲット Adalbert Merget の『ドイツ児童文学史』 *Geschichte der deutschen Jugendliteratur*¹⁵のような児童文学の歴史を振り返る書籍も登場しはじめたのも当然のことであったといえるだろう。というのも、メル

(11) リスト No.17

(12) リスト No.18

(13) リスト No.19

(14) リスト No.20

(15) リスト No.21

ゲットは、多様化する児童文学を前にして、児童書に求められる理想的な役割について、児童書の歴史という観点からあらためて問題提起しているからだ。

iii. 19世紀末の更なる特徴

1871年にドイツ帝国が誕生する。ドイツは徐々に国力を高め、イギリスやフランスが進めていた植民地主義の流れに乗ることになった。すでに紹介したメグENDORFの絵本にも、人種差別的な表現が登場しており、児童書がこうした社会情勢と無関係ではないことを示している。19世紀後半から20世紀にかけての児童文学の特徴の中でもとりわけ重要なのは、女性をターゲットにした読み物の登場であった。男性の教育の場が、家庭の外、つまり学校で行われるようになった一方で、依然として女性の（家事や子育てなど家の仕事に習熟するための）教育が家庭で行われていたことを反映していると思われる（もちろん、女子寄宿舎校を舞台とした作品も存在する）。テークラ・フォン・グンベルト *Thekla von Gumpert*、イザベラ・ブラウン *Isabella (Isabell/Isabelle) Braun* やオットーリエ・ヴィルダームート *Otilie Wildermuth*¹⁶、ブリジット・アウグスティ *Brigitte Augusti*¹⁷（これはペンネーム）、「プッキー」シリーズで有名なマグダ・トロット *Magda Trott*¹⁸のような女性作家による女性を主人公とする児童文学作品が登場してきた。『アルプスの少女ハイジ』の作者で知られるヨハンナ・シュピリ *Johanna Spyri* もまた同時代に活躍した、女性の児童文学作家と言えるだろう。

このような女性を主人公としてその成長を描いた作品群は、「少女文学（Backfischliteratur）」と呼ばれている。少女文学の多くは、数巻に渡った長大なシリーズもので、ある女性主人公の生涯、つまり子ども時代から結婚、結婚後の家庭や子育て、子どもの自立といった女性の一生を描くものであった。もちろん、そこには、子どもをとりまく家庭環境や自然環境に焦点があてられているが（ハイジの世界をみてみれば分かる）、良妻賢母と言い換えることができるような、当時の社会で求められていた理想的な女性像が色濃く反映されたものであった。なおドイツにおける少女文学の成立を扱った研究書として、『少女文学：18世紀の道徳的・教訓的読物から19世紀における「小娘文学」の成立まで』【KS334-H23】（YZ-909-グレ）や *Mädchenliteratur der Kaiserzeit : zwischen weiblicher Identifizierung und Grenzüberschreitung* 【YZ-B258】のほか、新しい研究書としては『良き女性、良きドイツ人』 *Good girls, good Germans*¹⁹を勧めたい。

国際子ども図書館が所蔵する少女文学作品には、『愛の一家』 *Die Familie Pfäffling* 【Y8-B2399】で戦前から日本にも紹介されていたアグネス・ザッパー *Agnes Sapper* の著作がある。また、エミー・フォン・ローデン *Emmy von Rhoden* の『イルゼの幸福』 *Der Trotzkopf*²⁰、タイト

(16) リスト No.22～25

(17) リスト No.26～30

(18) リスト No.31～42

(19) リスト No.43

(20) リスト No.44

ルに「少女 (Backfisch)」という名称そのものを冠したクレメンティーネ・ヘルム Clementine Helm の『少女の悲しみと喜び』 *Backfischchens Leiden und Freuden*²¹はコレクションに追加してもよいと思われる。

少女文学の作家として忘れてはならないのは、「末っ子」シリーズで知られるユダヤ人のエルゼ・ウリ Else Ury²²だ。ウリは、主人公の子ども時代から大人になるまでの成長過程、とくに戦間期に生きる女性の姿も描いたが、皮肉なことに、のちに国家社会主義 (ナチス) 体制下の対ユダヤ人政策によって著作活動が禁じられ、最終的に強制収容所で命を奪われている。

少女文学が女性の一生を描いたとすれば、男性を主人公とした児童文学としては、18世紀から続く、「ロビンソンもの (Robinsonade)」と呼ばれる冒険譚²³が人気を博していた²⁴。

ドイツにおけるロビンソンものの初期代表作であるゴットヒルフ・ハインリヒ・フォン・シューベルト Gotthilf Heinrich von Schubert の『新ロビンソン』 *Der neue Robinson*²⁵は、残念ながら所蔵されていないものの、彼の著作は2点所蔵されている (【Y2-B450】 【Y11-B493】 どちらも19世紀前半の史料価値の高いもの)。ちなみに彼は児童文学作家ではなく、自然科学を専門とする学者だった。フランツ・ホフマン Franz Hoffmann もまたロビンソンの翻案を手がけた作家で、彼の『勇ましきレオ』【児 952-19】 (邦訳版) が所蔵されている。また女性作家ゾフィー・ヴェルスヘーファー Sophie Wörishöffer は、女性であることを隠して、男性を読者とした冒険譚を執筆していた著名な作家だ²⁶。ダーヴィト・フリードリヒ・ヴァインラント David Friedrich Weinland の『ルラマン』 *Rulaman*²⁷は、石器時代の少年を主人公に、大自然の中での生活や、他部族との抗争を描いた。とりわけヴェルヌの影響を受けた、カール・テオドール・フィクトル・クルト・ラスヴィッツ Carl Theodor Victor Kurd Laßwitz の『両惑星物語』 *Auf zwei Planeten*²⁸のような SF 要素を交えた冒険譚も登場する。また男児の寄宿学校を舞台とするような作品も登場し、20世紀初頭の作品になるものの、オットー・エルンスト (・シュミット) Otto Ernst (Schmidt) による主人公アスムス=ゼンパーの成長を描いた三部作 (*Asmus-Semper-Romane*)²⁹は、当時10万部以上も売れたベストセラーであった。なお、シュミットの作品としては、難破船に取り残された船員の救出劇を描いたバラード『ニス・ランダース』 *Nis Randers* 【Y17-B17632】が国際子ども図書館には所蔵されている。

(21) リスト No.45

(22) リスト No.46~55。なお、彼女の作品のリプリントは多数あるが、かつてのドイツ地域についての記述、現在のポーランドやチェコなどの地名などは変更されている。

(23) ドイツ以外では、フレデリック・マリアット (Frederick Marryat)、ロバート・マイケル・バランタイン (Robert Michael Ballantyne) からロバート・ルイス・スティーヴンソン (Robert Louis Stevenson) の冒険譚の系譜や、ジュール・ヴェルヌ (Jules Verne) の作品がある。

(24) 追加すべき研究書としては、リスト No.56~58がある。

(25) リスト No.59

(26) リスト No.60~62

(27) リスト No.63

(28) リスト No.64

(29) リスト No.65~67

iv. ふたつの大戦に向かって

エルゼ・ウリのように、19世紀末から大戦期にかけては、作家の創作活動は社会情勢と切り離すことができなくなってしまった。

19世紀末から両大戦終了までの期間では、カール・マイ Karl May やエーリヒ・ケストナー Erich Kästner といった日本でも知られている作家が登場している。この両者の作品には、19世紀を通じて形成されてきた、冒険ものや寄宿舎ものという流れが引き継がれていることはいうまでもない。また19世紀末になると、「カール・マイ冒険物語」シリーズ³⁰のように、単なる冒険譚ではなく、ヨーロッパの帝国主義の影響を受けた、ヨーロッパ以外の大陸、とくにアメリカや開拓期のアメリカを舞台とする冒険譚「インディアンもの」(Winnetou-Literatur)が登場することになる³¹。カール・ファルケンホルスト Carl Falkenhorst、フリードリヒ・ヨアヒム・パイエケン Friedrich Joachim Pajeken といった作家の作品が、当時のドイツでは広く親しまれていた。また興味深い例として、女性作家ヘニー・コッホ Henny Koch の『花の国にて』*Im Lande der Blumen*³²をあげることができる。この作品は、ドイツ人家族が日本に滞在するというストーリーが描かれており、女児の目を通して、ヨーロッパとアジアの対比を描くという少女文学と帝国主義とを結びつけた作品として興味深い。

この時期の多くの冒険譚は、国際子ども図書館には所蔵されていない。上述のように、これらの作品はヨーロッパの帝国主義的な理念が色濃く反映されたものであって、読んで楽しむ作品というよりも、あくまでも歴史的史料として価値があるという点で、古書やリプリントで入手が可能であればコレクションに加えてもよいだろう。

第一次世界大戦の前後には、反戦を主題とする児童文学も登場した。ルドルフ・フランク Rudolf Frank の『少年は戦場から消えた』*Der Junge, der seinen Geburtstag vergass*【Y2-A474】、アドリエヌ・トーマス Adrienne Thomas の『アンドレア』*Andrea*【Y8-A5070】などがある。とくに同作家の『カトリン嬢兵隊となる』*Die Katrin wird Soldat*³³は、主人公カトリンが従軍看護師となり、戦争の暴力を女性主人公の目線から描いた少女文学と言えるものだ。

その一方で、19世紀初頭は、絵本の芸術的な価値が高まった時代でもあった。アールパート・シュミートハンマー Arpad Schmidhammer の『赤ずきん』*Rotkäppchen*【Y17-D3846】、エルンスト・クライドルフ Ernst Kreidolf の『花のメルヒェン』*Blumen-Märchen*【Y17-A6555】は、ともにユーゲントシュティールの影響を受けた作品である。とくにクライドルフは、動植物を精緻かつ美的に表現した作品を残している。その他、この時期を代表する画家として、多数の絵本の挿し絵を手がけた女性画家エルゼ・ヴェンツ=ヴィエトール Else Wenz-Viëtor、エルンス

(30) 主人公の名前を冠する *Winnetou* (1~4巻) と、これと共通の世界観が描かれる関連作品群を指す。国際子ども図書館では *Winnetou I-III*【Y8-B1805】のみ所蔵。

(31) 事典として、リスト No.68 がある。

(32) リスト No.69

(33) リスト No.70

ト・クツァー Ernst Kutzer、『うさぎ小学校』*Die Häschenschule*【Y17-A7724】の挿し絵で有名なフリッツ・コッホ＝ゴータ Fritz Koch-Gotha、クルト・ヴィーゼ Kurt Wiese などがいる。

特にヴィーゼ自身が文章と絵を手がけた『支那の墨』*The Chinese ink stick*³⁴は、昭和17年刊の邦訳版【児952-255】が国際子ども図書館には所蔵されている。これは墨が主人公となって中国の文化を紹介する内容であり、画家になる前に貿易商として中国に滞在していたヴィーゼの実体験が反映された作品だ。この作品は、中国での占領地の拡大をすすめる日本の植民地政策のなかで、邦訳され子どもたちに紹介されたものだったと言えるだろう。

表現主義、キュビズム、構成主義などの世紀末からヨーロッパ全土で続いた芸術運動の影響下、ドイツでは、とりわけワイマール共和国期において、バウハウス、ダダ、ノイエ・ザッハリッヒカイトなどの運動の影響を受けた絵本が登場する。国際子ども図書館の所蔵として、クルト・シュヴィッターズ Kurt Schwitters の代表的な絵本である『かかし』*Die Scheuche*³⁵を加えるとよいだろう。モンタージュ技法を取り入れたハンナ・ヘーヒ Hannah Höch の『絵本』*Bilderbuch*【Y17-B21310】は、近年のリプリントが所蔵されている。トム・ザイトマン＝フロイト Tom Seidmann-Freud（精神分析の祖フロイトの姪）のようなユダヤ人画家が活躍したのもこの時期であった。フロイトの絵本は国際子ども図書館には『魔法の船』がドイツ語オリジナル *Das Zauberboot*【Y17-B13081】と英語版 *The magic Boat*【Y17-B8495】で所蔵されており、いずれも戦前の貴重な版である。

v. 1933年から終戦

1933年に国家社会主義体制がはっきりしてくると、創作活動はさらに厳しくなり、ドイツ国外へ亡命して活動する作家もあらわれてきた。親体制派の児童文学作品としては、アルフレッド・ワイデンマン Alfred Weidenmann の『ヒットラー少年団第二小隊』【児970-146】*Jungzug 2*³⁶が、日本語にも翻訳されている。反体制的な性格の児童文学としては、アレクス・ウェディング Alex Wedding の『エデとウンク』*Ede und Unku*【Y8-B7394】がある。ドイツ人労働者階級の子どものとジプシーの子どもの友情を描いたこの作品は、ナチス時代には焚書扱いとなり、さらに作者のウェディングは、一時的にアメリカに亡命、戦後東ドイツで生涯を終えた女性作家であり、この作品には実在のモデルがいたこともあってか、関連書籍やドキュメンタリー作品も多く、今日でも読み継がれている名作である。

ナチス体制下において迫害されたユダヤ人作家として、少女文学作家のエルゼ・ウリについてはすでに紹介した。彼女以外にも、オーストリア出身のベッティナ・エーリヒ Bettina Ehrlich は、夫がユダヤ人だったため、イギリスで活動した³⁷。またケルン出身のユダヤ人の挿し絵画家フリッツ・アイヒエンベルク Fritz Eichenberg はアメリカへ亡命。煙突掃除の少年たちを主人

(34) リスト No.71

(35) リスト No.72

(36) リスト No.73

(37) リスト No.74, 75

公とした『黒い兄弟』*Die schwarzen Brüder*【Y8-A5896】（アニメ「ロミオの青い空」の原作）の作者リザ・テッツナー-Lisa Tetznerもまた、亡命児童文学作家である。

ヒトラー政権やユダヤ人虐殺という重いテーマを扱った児童文学が戦後どのように登場しているのか、その歴史を概説することは容易ではないが、戦後すぐには沈黙、1968年以降になって、徐々にこうしたテーマが子ども向けに描かれるようになった。そしてまた、ユダヤ人であることからイギリスに亡命したジュディス・カーJudith Kerrの『ヒトラーにぬすまれたももいろうさぎ』*When Hitler stole pink rabbit*【Y8-B4708】*Als Hitler das rosa Kaninchen stahl*【Y8-A2918】のように、ドイツ以外で発表された作品の翻訳もまた無視できない役割をもっていた。ドイツ人の作家による作品としては、ドイツ人とユダヤ人の子どもの交流に戦争がおとした影を描いたハンス・ペーター・リヒターHans Peter Richterの『あのころはフリードリヒがいた』*Damals war es Friedrich*【Y8-A5889】（ドイツでの初版は1961年！）がある。

終戦後、ドイツの国境線があらたにひきなおされ、かつてのドイツの一部は、現在のポーランドやチェコへと編入された。シレジアやズデーテンラントといったかつてのドイツで出版されていた児童文学や絵本もまた無視することのできないテーマであるが、本報告書では省かせてもらう。ただし、この地域から追放されたドイツ人（被追放民）をテーマとする作品については言及しておきたい。マルゴット・ベナリー＝イズベルト Margot Benary-Isbertの『ノアの方舟』*Die Arche Noah*（初版は1945年）³⁸は、追放された人々の一群を方舟を作るノアにたとえて、被追放民を描いた素晴らしい児童文学作品だ。反戦をテーマとした絵本を多数発表しているグードルン・パウゼヴァング Gudrun Pausewangの『小さな逃亡者』*Auf einem Langen Weg*³⁹や『ロジンカヴィーゼから遠く離れて』*Fern von der Rosinkawiese*⁴⁰、クリスティーネ・ネストリンガーChristine Nöstlingerの『あの年の春は早くきた』*Maikäfer, flieg!*【Y8-A5674】、ペーター・ヘルトリンク Peter Härtlingの『松葉杖』*Krücke*【Y8-B14593】は、自伝的な要素も含む子ども目線から終戦ならびに被追放民の姿を描いた作品といえる。ゾルプ人（後述）たちの伝説をモチーフとした『クラバート』*Krabat*【Y8-A2439】で知られるオトフリート・プロイスラーOtfried Preußlerは、こうしたかつてのドイツ地域のひとつズデーテンラント出身でもある。

vi. ふたつのドイツ

終戦後、あらたな国土が割譲されただけでなく、ドイツは西ドイツと東ドイツというふたつの国に分割されることになった。東ドイツの代表的な児童書出版社であったキンダーブーフ・フェアラク（Kinderbuchverlag）社刊行の作品は、東ドイツ時代の絵本としてコレクションすることが望ましいが、現在では入手は困難であろう⁴¹。東ドイツで読まれた多数の絵本の挿し

(38) リスト No.76

(39) リスト No.77

(40) リスト No.78

(41) リスト No.79～94。Kinderbuchverlag社の情報については、*Erzähl mir vom kleinen Angsthasen*【Y8-B11866】や、入手困難だが、リスト No.89のようなカタログがある。

絵を描いた画家のヴェルナー・クレムケ Werner Klemke は、この出版社のお抱え挿し絵画家でもあり、東ドイツで子ども向けに編まれたグリム童話集の挿し絵も描いていた⁴²。

『白い貝の言いつたえ』 *Lütt Matten und die weisse Muschel* 【Y8-B7399】で知られるベンノー・ブルードラ Benno Pludra は、東ドイツ時代に非常に読まれた児童文学作家であった。とはいえ多くの作品は、新しい東ドイツの社会主義体制を支えるメディアの役割も担っていたと言ってよい。例えばエルヴィン・シュリットマッター Erwin Strittmatter の『ティンコ』 *Tinko* 【Y8-B7396】は、東西ドイツ分割後、東ドイツ地域で行われた土地改革（大土地所有者の土地を接収し再分配する制度）をテーマにしており、伝統的な土地所有にこだわる祖父と、新しい土地制度に理解を示す父との間におかれた子どもを主人公とした作品だ。いうまでもなく、この作品は、当時のソ連主導の土地改革を正当化するプロパガンダ作品であった。もちろん、東ドイツ時代にも、フランツ・フューマン Franz Fühmann のようなファンタジー豊かな作品たちも出版されていたし、『学校ユウレイとおてんばカローラ』 *Das Schulgespenst*⁴³のペーター・アブラハム Peter Abraham は、東ドイツの作家だが、東西再統一後も一貫して、児童文学作品を発表している。彼の東ドイツ時代の作品⁴⁴は多数再版されており、収集は比較的容易だと思われる。また『しょうぼうしょは大いそがし』 *Bei der Feuerwehr wird der Kaffee kalt*⁴⁵や、『こわがりうさぎのホッピーくん』 *Der Kleine Angsthase*⁴⁶のように、再統一後のドイツの絵本として定着している東ドイツ由来の絵本もある。

他方、西ドイツの児童文学は比較的、リアルタイムに日本にも紹介されてきたと言えるだろう。ただし東西ドイツの分断、その象徴としてのベルリンの壁は、児童文学としては一種のタブーであったと言える。東ドイツ時代にベルリンの壁を扱った例外が、分断されたベルリンの子どもたちの文通をテーマとした1988年刊のクラウス・コルドン Klaus Kordon 『ビンのなかの手紙』 *Die Flaschenpost*⁴⁷だ。彼は、第一次大戦後の1919年から1945年のベルリンの激動の歴史を子どもの目線から描いた「ベルリン三部作」⁴⁸の作者として有名だろう。

2010年前後から、東ドイツをテーマとしたたくさんの児童文学が出版されるようになったが、その理由は、子ども時代にベルリンの壁の崩壊を体験した作者たちが、自伝のような形で、東西ドイツの分断を語り始めたからだ。所蔵資料では、ドリット・リンケ Dorit Linke の『青い境界線の向こう側』 *Jenseits der blauen Grenze* 【Y8-B15387】や、特徴的な動物のイラストで知られるナディア・ブッデ Nadia Budde の『好きなものを選びなさい、でも急いで！』 *Such dir was aus, aber beeil dich!* 【Y17-B10977】、カチャ・ルートヴィッヒ Katja Ludwig 『壁のこぶた』 *Das*

(42) リスト No.87

(43) リスト No.90

(44) リスト No.91～93

(45) リスト No.94

(46) リスト No.88

(47) リスト No.95

(48) 『ベルリン 1919 : 赤い水兵』 *Die roten Matrosen oder Ein vergessener Winter* 【Y8-A2489】、
『ベルリン 1933 : 壁を背にして』 *Mit dem Rücken zur Wand* 【Y8-B3414】、
『ベルリン 1945 : はじめての春』 *Der erste Frühling* 【Y8-A2522】の三作品（*Trilogie der Wendepunkte*）。

Mauerschweinchen【Y8-D1046】などの作品が相当する。そのほか、マティアス・ミュッケ Matthias Mücke の『誰でもない国』*Niemandland*⁴⁹や、ハンナ・ショット Hanna Schott 『フリッツはそこにいた』*Fritzi war dabei*⁵⁰、クリステン・フルトン Kristen Fulton 『風船といっしょに自由へ』*Mit dem Ballon in die Freiheit*⁵¹なども収集してよいだろう。

西ドイツ特有の児童文学のテーマとしては、戦後の経済復興のために、労働力として西ドイツ地域に呼ばれたトルコ人、イタリア人、ギリシャ人などの出稼ぎ労働者、ガストアルバイター（Gastarbeiter）を扱った作品が、社会情勢を反映したものとして重要である。イタリア人労働者を扱ったハンス＝ゲオルク・ノアック Hans-Georg Noack の『Benvenuto は「こんにちは」』*Benvenuto heisst willkommen*⁵²は代表的な作品である。またウルズラ・キルシュベルク Ursula Kirchberg 『セリムとスザンネ』*Selim und Susanne*⁵³も、ドイツ語とトルコ語併記の版が出版され、ガストアルバイター第二世代の子どもたちを対象とした文学作品として歴史的価値がある。

このようにドイツとりわけ西ドイツでは、戦後早くから多文化社会を意図的に作りだしてきた。ドイツは、外国人作家の絵本や児童書が翻訳され読まれている社会であると言えるが、こうした歴史的背景も大きな要因のひとつだと思われる。そしてまた、忘れてはならないのは、ドイツには、ヴェント語やゾルプ語といったスラブ語系の言語を母語とする少数民族（ただし全ての住民はドイツ語ができる）もいることである。ドイツ国内で、こうした言語による児童文学も現在は、積極的に創作され出版⁵⁴されていることも付け加えておきたい。

最後に今後コレクションを拡充する際に参考となる、雑誌、ドイツで開催されている賞や児童文学関連の雑誌のリストをあげておきたい。このようなリストを参照しつつ、コレクションが拡充されることを楽しみにしている。

なお、各項末尾の丸括弧内は選書の優先度。

i. 専門雑誌（ドイツ語圏） 新刊や話題の児童書が紹介される。

1. Eselsohr⁵⁵ 1982年に創刊された、ドイツ語圏児童文学に関する月刊誌。（オリジナルがドイツ語のもののみ網羅的に収集）
2. Julit⁵⁶ Deutscher Jugendliteraturpreis を主宰する児童文学協会（AKJ）発行の季刊誌。

(49) リスト No.96

(50) リスト No.97

(51) リスト No.98

(52) リスト No.99

(53) リスト No.100

(54) ザクセン州・パウツェン市のドモヴィナ出版（Domowina-Verlag）など。

(55) <https://www.eselsohr-leseabenteuer.de/>

(56) <https://www.jugendliteratur.org/julit/c-120>

(オリジナルがドイツ語のもののみ網羅的に収集)

3. Kolibri⁵⁷ 同協会が年1回発行する推薦図書カタログ。翻訳作品が紹介されることが多い。
(オリジナルがドイツ語のもののみ網羅的に収集)

ii-1. 児童文学賞 (ドイツ)

1. Kalbacher Klapperschlange⁵⁸ フランクフルト近郊のカルバッハで開催される児童文学賞。子どもが審査委員を務める。(オリジナルがドイツ語のもののみ収集)
2. Buxtehuder Bulle⁵⁹ ブクステフェーデで1971年から開催されている、ドイツで最も歴史のある児童文学賞。13歳以上向けの作品を対象。(受賞作品を収集)
3. Gustav-Heinemann-Friedenspreis für Kinder- und Jugendbücher⁶⁰ 平和教育という観点から選考される児童文学賞。(受賞作品を収集)
4. Deutscher Jugendliteraturpreis⁶¹ 1955年設立の児童文学に関する全国的なワーキンググループ、児童文学協会(AKJ)が主催する、ドイツで最も権威のある児童文学賞。(受賞作品を収集)
5. Korbinian - Paul Maar-Preis für junge Talente⁶² ドイツ児童・青少年文学アカデミー主催の新人児童文学作家の賞。(今後の創作活動が期待される作家がとりあげられるため、受賞者の作品は網羅的に収集するのが望ましい)
6. Josef Guggenmos-Preis für Kinderlyrik⁶³ 同アカデミー主催の、韻文を対象にした賞。(受賞作品を収集)

ii-2. 児童文学賞 (オーストリア)

1. Österreichischer Kinder- und Jugendbuchpreis⁶⁴ 1955年に設立された、オーストリア政府(連邦文化省)主催の児童文学賞。(受賞作品を収集)
2. Kinder- und Jugendbuchpreis der Stadt Wien⁶⁵ 1954年に設立された、ウィーン市(文化・科学局)主催の児童文学賞。(受賞作品を収集)

(57) <https://www.jugendliteratur.org/kolibri/c-126>

(58) <https://www.kinderverein-kalbach.de/klapperschlange/>

(59) <https://www.buxtehuder-bulle.de/index.php/de/>

(60) <https://www.politische-bildung.nrw/foerderung/gustav-heinemann-friedenspreis-fuer-kinder-und-jugendbuecher>

(61) <https://www.jugendliteratur.org/deutscher-jugendliteraturpreis/c-62>

(62) <https://www.akademie-kjl.de/preise-auszeichnungen/paul-maar-preis/>

(63) <https://www.akademie-kjl.de/preise-auszeichnungen/josef-guggenmos-preis/>

(64) <https://www.lesefest.at/>

(65) https://www.geschichtewiki.wien.gv.at/Kinder-_und_Jugendbuchpreise_der_Stadt_Wien

ii-3. 児童文学賞（スイス）

1. Schweizer Kinder- und Jugendbuchpreis⁶⁶ 前身の Schweizer Kinder- und Jugendmedienpreis を引き継ぎ、2020年に改称。スイス児童・青少年メディア研究所（SIKJM）などが政府の助成を受けて運営。（受賞作品を収集）

iii. 絵本、挿し絵についての賞

1. SERAFINA⁶⁷ ドイツ児童・青少年文学アカデミー主催の賞。（紹介作品を収集）

iv. 新刊情報（参考）

1. LesePeter⁶⁸ ドイツ教育学術労働組合（GEW）の児童・青少年文学・メディア作業部会（AjuM）が、毎月新刊の中から優れた児童・ヤングアダルト作品を選定。
2. Luchs-Buchpreis⁶⁹ ドイツの週刊紙 Die Zeit とラジオ局 Radio Bremen が、新刊から推薦図書選定する（月間受賞作と年間賞）。2025年分（2026年3月発表）で終了予定⁷⁰。

v. 雑誌（参考） 学術雑誌。言及作品が参考になる場合があるが、必ずしも新刊ではない。

1. Schriftenreihe Europäische Märchengesellschaft e.V.（EMG）⁷¹ 欧州メルヘン協会による、民話・おとぎ話の研究論文や講演をまとめた年刊誌。
2. Jahrbuch der Gesellschaft für kinder- und jugendliteraturforschung⁷² ドイツおよびドイツ語圏スイスの児童・青少年文学研究学会（GKJF）による、査読付き年刊学術誌。

vi. 児童文学賞（参考） ドイツ各地で開催される児童文学賞。定期的にチェックし、受賞した作品を収集してもよいかもしれない。

1. Rattenfänger-Literaturpreis⁷³ ハーメルン市主催
2. NRW-Kinderbuchpreis⁷⁴ ノルトラインヴェストファーレン州主催

(66) <https://www.schweizerkinderbuchpreis.ch/>

(67) <https://www.akademie-kjl.de/preise-auszeichnungen/serafina/>

(68) <https://www.gew.de/ausschuesse-arbeitsgruppen/weitere-gruppen/die-ajum/lesepeter>

(69) <https://www.zeit.de/serie/luchs-buchpreis>

(70) <https://www.bremenzwei.de/themen/kinder-und-jugendbuchpreis-der-luchs-radio-bremen-und-die-zeit-beenden-kooperation-100.html>

(71) <https://www.maerchen-emg.de/publikationen/emg-schriftenreihe>

(72) <https://ojs.ub.uni-frankfurt.de/gkjf/index.php/jahrbuch/index>

(73) <https://www.hameln.de/de/der-rattenfaenger/rattenfaenger-literaturpreis/wissenwertes-zum-preis/>

(74) <https://www.mkw.nrw/themen/kultur/kunst-und-kulturfoerderung/nrw-kinderbuchpreis>

3. Hans-im-Glück-Preis⁷⁵ リンブルク市主催
4. Oldenburger Kinder- und Jugendbuchpreis - Sonderpreis Illustration⁷⁶ オルデンプルク市主催

(75) <https://www.limburg.de/Freizeit-Tourismus/Kunst-Kultur-/Hans-im-Gl%C3%BCck-Preis/>

(76) <https://www.oldenburg.de/startseite/kultur/kulturprojekte-und-preise/kulturpreise/kinder-und-jugendbuchpreis.html>